

定住、公民館にできること

松江市来待地区公民館

1 松江市来待地区公民館の概要

松江市来待地区公民館(以下「来待地区館」とする)は、松江市宍道町の来待地区(人口 3500 人)を公民館区として、平成 17 年に来待公民館として開館。当初から住民自主運営をめざして運営協議会による公民館活動を進めてきた。松江市の公民館制度一体化の先駆として、平成 20 年から指定管理による住民自主運営に移行し地区公民館として再出発した。(来待地区館は平成 27 年には地区公民館から地元の集会所へ移行することが条件付けられている)。平成 20 年度島根県優良公民館表彰を受賞。

2 事業の概要

(1)はじめに

①実証事業名 定住、公民館にできること

②実証事業のテーマ

住民が、地域のよさの再発見を通じて、地域に自信を持ち、定住促進を柱に、地域の将来に何が必要か・どう活動したらいいのかを実践を通じて学びあう。

③実証事業のねらい

地域で取り組まれている散発的なまちづくり活動をストーリー化して、課題の発見・情報化・実践の仕方と組織化を、自分の体を動かしながら学びあう。そのことを通じて、行政まかせ・漠然とした定住促進対策を、住民自身が担うという認識と力を育てていくことが事業のねらい。

(2)具体的な取組(内容、活動状況 等)

①「地域を再発見しよう」

自然環境や農林業・文化資源など日頃気付かない地域のよさを、地域外の住民と交流・課題の共有を図ることで再発見し、地域の将来のために資源化する取り組み。

ア まちむら交流 「きまち炭焼き倶楽部」の開設

和名佐小林地区住民の指導による炭焼き窯での体験教室を開設。10月11日第1回きまち炭焼き倶楽部を開会、女性市民5人が参加した。

イ 住民による八重山登山道整備と山城講演会

・八重山大平山城講演会 6月28日

和名佐小林地区住民の主催により地元の和名佐会館で、山城講演会を開催して中世の山城の構造や意味を学んだ。(講師:山根正明氏、参加70人)

・八重山登山道整備の開始 19年9月より和名佐小林地区の住民有志により開始

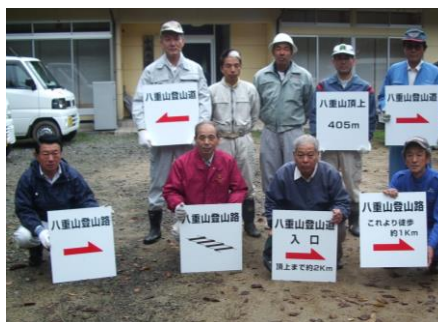
・登山道の完成と道標の設置 20年11月9日に登山道が完成し、道標を設置

・市民に呼びかけ八重山登山と山城現地講演会 21年3月22日



市民参加でレディス炭焼き教室

広く市民に参加を呼びかけ八重山に登山。山根正明氏を講師に現地で山城講演会



(写真左)地域内外から70人が参加・山城講演会(同右)登山道に道標を設置

ウ グリーンツーリズム学習

古民家・空き家の活用の学習、農業の体験交流など、来待地区ボランティアネットワークの活動と連携して取り組んだ。農業体験の体制を一部整備できた。県内各地の視察や農地活用の学習などは今後の課題に。



六子・古民家ライブから

②「一人ひとりを大切に・人のつながりをもっと深めよう」

都市部とは異なり壊れずに残っている人のつながりを定住促進の大切な要素として、さらに人のつながりを深めと、一方で一人ひとりを大切にする風土作りを進める取り組み。

ア 住民の運営による四季の交流イベントの開催

- ・森のマリンパーティー 7月20日農村公園
地元・幼稚園と野外で開催。参加600人。



(写真左上)夏の森のマリンパーティー(同右上)来待地区敬老交流会(同左)第4回来待地区公民館まつり

- ・来待地区敬老交流会 9月6日 ステージ・交流会など。幼稚園と共催、参加150人。
 - ・来待地区公民館まつり 10月19日 ステージ・展示・屋台村など。参加500人。
 - ・新成人の集い 21年1月3日 新成人ら100人参加。
 - ・公民館春のまつり 3月8日 巣立ちをテーマに学校園とお祝いの集い
- それぞれの交流イベントでは、住民による運営、あらゆる世代の参加、食べ物など各種の住民のお店によるテント村での交流などを大切にして運営した。

イ 一人ひとりを大切にする明るいまちづくり

3月28日 きまち人権の集いを開催

講演(講師:目次知浄氏)と市民グループの活動報告(人形劇と歌)など、身近な解りやすいテーマと手法で人権を考える場として開催。



若い母親達による市民グループ

③地域に自信、情報の受け手から発信者へ

ア 地域を再発見、ホームページで田舎暮らしの情報発信
「地域情報のお知らせ」「田舎で暮らそう」「来待青春むら」の各コーナーで、田舎暮らし情報・UIターン情報などを発信。約15000回のアクセス。

イ 市内のイベントで来待のアンテナショップ

11月30日 湖南ブロック市民学習発表会で、農産品や手づくりショップ・飲食店の「きまちテント村」としてアンテナショップを出店した。



来待地区館のホームページ

④住民が地域の主人公になろう

こうした活動は地域住民が担うことによって実現し、そのプロセスが住民が地域の主人公となるまちづくりを推進するとの認識から、あらゆる地域のボランティアが集合する来待地区ボランティアネットワークの活動を支援した。

「きまち青春むら」の活動を支援してきたが、当初予定した「学校応援団」(仮称)については次年度の課題となった。

⑤その他の活動 「事業評価委員会」の開催

モデル公民館の事業、地区館の事業など全体について、外部委員を招き、21年2月12日に評価委員会を開催した。委員は、外部委員として福間忌部公館長・真先城北公館長・石田生涯学習課係長・藤原地域協会会長他の各委員と運営協議会から参加。

3 事業の成果と課題

(1) 当初、事業のテーマとした「定住、公民館に出来ること」については、一つには住民が各種の取り組みを通じて自身が定住の課題に取り組むという意欲の醸成、二つには地域の将来にむけた地域づくりの方向の共通理解の醸成といった意味があったと思われる。

そうした意味では、まだシンボリック・端緒としての取り組みだが、意欲的で持続的な活

動を進めていく住民がいろいろな場面で表に出てきたという実感がある。具体的には、炭焼き倶楽部・登山道整備事業での和名佐小林地域の住民の活動、各交流イベントでのあらゆる年代の男女、とくに若い男女の運営参加などが顕著な例である。

(2) 個別の事業では、①地域の再発見では、地域住民の関心を高め、多くの地元参加者を得ている、②地域外との交流という点では、手法の問題もあり十分な参加者は集めきれていないが、炭焼きや農業体験、交流イベントなど、地域外からの受け入れと交流について理解と態勢は一定準備された。③空き屋・古民家の活用という点では、他に注目されるＩターンがあったこともあり、空き家に目を向けるという一定の問題提起を行った。④新しいホームページという手法やアンテナショップの開設では、幅広い地域で「来待の元気」が評価され、住民にも「発信すること」の意味が理解されつつある。

(3) 今後の課題としては、積み残した課題である①グリーンツーリズムの研究、②学校応援団の活動という課題は、なんとしても次年度に実施する必要がある。

全体の課題としては、粘り強く今後も事業を継続することで定着と深化をはかること。そして、さらに広がっていく事業をになう活動主体を、幅広く地域に創り出していくことに尽きる。

4 今後の方向性

今後は、地域内に目を向けるだけでなく、社会的な状況や農村志向、農業の新局面、滞在型余暇活動への関心といった、社会的な要請も踏まえて、地域の将来を考える視点も必要になる。

これまでの1年間の事業は、自主運営の意欲の醸成と地域の方向性の模索ということで地域力を醸成することに努めてきたが、今後はこうした地域合意の形成を、具体的な課題の実現にむけて発展させていく視点が必要になる。

地域の再発見を通じて、地域のよさを見出した住民が、産業・福祉・環境・教育・文化・人のつながりといったあらゆる暮らしの局面で、いっそう魅力的な地域づくりにむけて、まちづくりを進めていく「ほんもの地域力」に育つ道筋を具体的に探っていきたい。